

編集後記

昨年度の「編集後記」で、「振り返ってみると、ほぼ伝統的と言えると思うが、本学会では「社会の在り方」についての議論が少なからず行われてきたし、それに関する論文も掲載されてきた。しかし、社会の在り方を象徴するともいえる「行政」そのものを研究対象とすることはなかったのではなかろうか。」と述べたが、今年度は期せずして、行政に関わる論文が約半数を占めている。一つの発展と言えるのではなかろうか。

また、昨年度は、「特別寄稿」、「提言」、「パブリックコメント」という新しい範疇の論文を掲載した。その中に当時注目を集めていた「原子力発電」に関する論文が半数弱の件数になった。そのことも影響したものと思われるが、学会名「総合知学会」、「Journal of the Multi-Disciplinary Knowledge」についての「自然検索数」が期待以上になった。その「自然検索数」と「自然検索数」に公表されているクリック数確率を乗じて求めた「クリック数」の両者を、次の表に示す。

自然検索調査	2018		
		04.09.12	07.02.15
総合知学会	検索数	7,830,000	9,490,000
	順位	1-8	1-6,8
	クリック数	3,851,577	4,474,535
The Society of Multi-disciplinary Knowledge	検索数	12,600,000	48,100,000
	順位	1-2	1-3
	クリック数	3,192,840	15,709,460
合計	クリック数	7,044,417	20,183,995

この4月を基準にすると、7月のクリック数が、それぞれ日本語名は1.16倍、英語名4.92倍、合計値が2.87倍になり、2千万を超えている。まさに驚きと言わざるを得ない。すなわち、言葉の違いという「壁」を感じさせない結果である。言い換えれば、言葉の壁が少なくともサイバースペースでは崩壊しつつあるといえよう。そして、これはまさに、「グーグル翻訳」が齎したものと言えるのではなかろうか。もちろん、私達の論文の内容による寄与を否定するものではないが。

今や、「グーグル翻訳」が象徴しているように、産業の壁も崩壊しつつある。ドイツが先端を切った感のある「インダストリー4.0」は、2011年に国家プロジェクトとして採択され、2013年に産官学が一体となった推進組織を発足させている。米国はすでに1997年に電子商取引の世界化構想を発表している。また、2012年に国家先進製造戦略計画を発表し、その一環として、国家ロボットイニシャティブを発表している。2014年にインダストリアル・インターネット・コンソーシアムが産業実装とデファクトスタンダードの推進を目的として設立された。

一方、わが国では、ロボット革命イニシャティブ協議会が設立されたのは2015年であり、インダストリアル・バリューチェーン・イニシャティブが一般社団法人として設立された

のは 2016 年である。さらに、経済産業省が **Connected Industries** の構想を発表したのは 2017 年末で、2016 年初頭に閣議で決定された第 5 期科学技術基本計画で取り上げられた **ソサイエティ 5.0** の一環だとしている。何れにても、米・独の後塵を拝しているばかりでなく、その構想は国内に閉じており、むしろ、産業の壁を壊そうなどとは考えもしていないように感じられる。

このような状況をみると、ここにも、技術者が多い我が総合知学会が取り組むべき課題があると言えよう。